

---

SSSS

風待月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SSSS

### 【コード】

NO589BA

### 【作者名】

風待月

### 【あらすじ】

現代に『魔法』があったら、どうなると思う？ なんでもできる『魔法使い』にも、どうにもならない事はある。

たった30年前に《魔法》が現れた世界、常人以上超人未満の《魔法使い》たちの、普通以上特殊未満の学生生活。

【\*検証用実験文章です。お見苦しい点があることを理解して頂いた上でお楽しみ頂ければ嬉しいです。感想・指摘などの形で検証に

協力頂けたら幸いです【】

0000 6月2日のはじまり

「歯あ食いしばって腹に力入れろよ！」

「え！？ ちよつと堤つつみさん ！？」

つつみとおじ堤十路の人生における願いは、普通に生きること。

心身健全・学業大成・金運招福・大願成就。いずれも高望みなんてしていない。

風邪で寝込んで入院しなければOK。100点は無理でも赤点取らなければ問題なし。裕福でなくても借金なく生活できればいい。ついでに明かすと、恋愛成就なんて願望も全く持っていない。

何事もほどほどで十分。出る杭は打たれる。過ぎたるは及ばざるがごとし。

当然、揉め事なんてまっぴら。

基本は待ち、受身の姿勢。トラブル解決不可能なら逃げることも躊躇しない。男らしくないという文句は聞き流す。

だから家族からは『なあなあ主義』と言われる。そんな彼が……いや、普通なら誰でもそうだが。

「轢いたー！ー！？」

街中でオートバイに乗ったまま、人間に突っ込むことになるのは想像もしていなかった。

推定体重70kgの物体に、車体+2人の人間=350kg超の重量が、それなりの速度でまともに激突。はねられた男は、カエルが潰れたような声を上げて吹っ飛んだ。

しかしブレーキをかけながらの衝突なので、死ぬほどではないだろう。

「よし」

「人身事故を起こして平然としてる堤さんが怖いです……」

「前の学校で何回もやったから慣れた」

「どんな学校ですか!？」

「そんなことより」

残るもう1人が、人身事故を正当防衛と証明してるので、なにも問題ない。

仲間がオートバイにはねられるという突然の事態に、呆気にとられた男の手には、黒光りする金属の塊。

我に返った瞬間、それを向けられるのは、想像にかたくない。

「あつち、木次きすきの担当でいいのか？」

「え!？ あ、はい!」

リアシートに乗った学生服の少女が、構えた長大な杖を男に向けた途端、空間に淡く光る幾何学模様が描かれる。

それはあたかも魔法陣。

「実行!」

その一言で小規模ながら、超常の落雷が発生し、残る男に直撃。手にしていた金属塊を取り落とし、薄い煙を上げて崩れ落ち、見ていると不安になる痙攣をする。

「……そのエゲつなさで、俺が人をはねたの、文句言われたくない」

「ちゃんと手加減しましたよ!？」

「銃が暴発したらどうする気だったんだ？」

「えーと……結果オーライということ……」

「それで、どうすればいい？」

「追ってください！」

「了解」

はね飛ばしてうめいてる男と、感電してうめいている男は、誰かがなんとかしてくれるだろうと判断し、十路はオートバイを発進。

「やっちまった……」

堤十路つつみとおしの人生における願いは、普通に生きること。

揉め事なんてまっぴら。

家族からは『なあなあ主義』と言われてる。

だから。

《魔法使い》の少女を後ろに乗せて、誘拐犯をオートバイで追いかけるなんて、目標から真逆の時間は望んでいなかった。

00|010 AM10:47 静岡県御殿場市某ファミレスにて(前書き)

・検証事項：ぱつと見読めない固有名詞

00 | 010 AM 10 : 47 静岡県御殿場市某ファミレスにて

「お待たせ致しました」

ドリンクバーのコーヒーと、オレンジジュースしか乗ってなかったテーブルに、ウェイトレスの手で、チョコバナナパフェと伝票が置かれた。

「サーンクス」

「ごゆっくりどうぞ」

朝食には少々遅く、昼食には早い時間の、静岡県御殿場市。

7月を過ぎれば登山客が増えるのだろうが、まだ6月のために人もそう多くない、富士山麓の一角に構えるファミレスで、1組の男女が向かい合うテーブルから、ウェイトレスが離れた。

早速パフェの器にスプーンを突っ込むのは、中学生と思える小柄な少女。

それを頬杖をついて眺めているのは、少年と呼ぶには少し過ぎた高校生。

少女の雰囲気は天真爛漫。

大胆に足を出していても色気は感じず、健康そうな印象が先に立つ。幼さが残る明るい顔立ちには、どこかイタズラ小僧のような愛嬌がある。

げっ歯類の動物を連想。そう聞けばリスやハムスターが思い浮かぶだろうが、トゲだらけのヤマアラシも当てはまる。

少年の雰囲気は怠惰。

『鋭い目つき』と言えば聞こえはいいが、気が抜けていれば人相

が悪いだけ。量販店のポロシャツとジーンズに包まれた体は細身の筋肉質だが、背筋を丸めて頬杖をついていれば、そんな体付きは隠されて、ただだらしない。

例えるなら野良犬。ただし今はエサをもらって満足そうに昼寝しています。

少女の名前は堤南十星<sup>つつみなとせ</sup>。

青年の名前は堤十路<sup>つつみとおじ</sup>。

顔立ちも雰囲気もあまり似ていないが、2人の関係は同じ姓が示している。

「なとせ。ほら、ついてるぞ」

パフエグラスに半分顔を突っこんでいたために、鼻の頭についたクリームを、テーブル越しに手を伸ばしてナプキンで拭いてやる。

「さんきゅー」

「久しぶりに会うけど、お前、なんも変わってないなー……」

「相変わらず食べ方が子供っぽい？」

「……まあ、そんなとこ」

Tシャツの上に羽織ったミリタリーベスト、今はテーブルの隅に乗せているキャスケット帽、履いているのはデニムのホットパンツにバスケットシューズ。

少年にも見えてしまう南十星<sup>なとせ</sup>の服のことを考えていたが、それは口に出さない。

「悪いな、なとせ……平日なのに呼び出すことになって」

「気にしない気にしない。たった2人の兄妹<sup>きょうだい</sup>じゃん。それに今さら学校休んだところで、あたしゃ補習受ける成績だし」

「お前なあ……」

「兄貴、そんなことより」

連絡自体はそれなりにしていたものの、直接顔を合わせるのは数カ月ぶり。

はるばる飛行機に乗って会いに来た南十星は、スプーンを置いて、再会と転機を祝った。

「退学おめでと　を　っ！？」

多大な怒りと、ほんの少しのやるせなさど、わずかばかりの『コイツやっぱリアホだ』という再認識が込められた、十路の渾身のデコピン炸裂。

額を押さえた南十星、二人掛けのソファを涙目でのたうち回る。

「なにがめでたいかこの愚妹があ！？」

「『シャバの空気ウメー』って感じっしょ！？」

「規律の凄まじい学校だったよ！　刑務所出たような気分ではあるよ！」

「だったらめでたいじゃん！」

「寮を追い出されたら生活に困るんだけどな！？」

「こつち来りゃいーじゃん。おじさんたちも『そうしろ』って言うてくれてたよ？」

「いや、気持ちは嬉しいけど……」

早急に解決しなければならぬ現実的な話になり、そして店内の非難の目にも気づき、声のトーンが下がる。

2人の両親は、すでに他界していて、子供の頃に生活していた家もない。

だから南十星は、十路が全寮制学校に進学したのを機に、伯父の

ところで生活することになり、そして十路とみじは学生寮が唯一の寢床だったのだが

「じゃあ、どうすんの？ いつもの『なるようになるさ』的なあな  
あ主義を發揮しても、どうもできないっしょ？」

その質問に答えず十路とみじは、A4サイズの封筒を差し出した。

「なにそれ？」

「学校案内、だろっな……」

封筒の下部に印刷されているのは、『学校法人 修交館学院しゅうこうかん』と  
いう文字と、兵庫県神戸市の住所。

既に封は切つてあるので、遠慮なしに南十星なとせ南十星は中身を確認する。

「わお、すっごい学校じゃん」

厚手のパンフレットにカラー印刷されているのは、広い敷地に建  
つ、まだ新しい校舎群と、充実した学校設備の数々。

私立校に多い付属型。いわゆるエスカレーター式なのか、法人全  
体だと幼稚園から大学まで同じ名前の学校があるらしい。

「このパンフ、兄貴が頼んだの？」

「いや。1週間くらい前に、なぜか寮の机の上にあった」

「なんで？」

「俺が訊きたいよ……」

それはつまり、通常の郵便物とは違って、学校の事務局も寮監の  
手も通すこともなく、正体を知られないよう誰かが直接、十路とみじにこ

れを渡そうとしたということ。

中身がパンフレットだけなら、十路とみちの今後を心配する誰かの親切と考えることもできるが、同封されていたのは、それだけではなかった。

転入時に必要な書類もろもろ。授業料免除の申請用紙。学生寮の入居に提出する書類その他。

極めつけは、既に十路とみちの顔写真が貼られている、修交館学院高等部3年生の学生証。

「どーやら俺は、その学校からスカウトされてるらしい……正直、不気味なんだけど?」

「まさか兄貴の退学と関係してんの?」

「わからない。関係ないと断言できないけど、関係あるとは考えにくいんだが……」

十路をスカウトとするために、退学させる暗躍があったとは考えられないが、見知らぬ学校の誰がどこで十路の退学話を聞いたかという疑問が残る。

「でも、こんな物まで渡されたからな……」

そう言いながら十路とみちが見るのは、ソファの隣に置いたケース。

縦30cm、横40cm、厚さ10cmほどの、アタッシェケースのように合金に覆われている小型のもの。

「そーいやさつきからソレ、気になってたんだけど、中身なんなの?」

「秘密だ。お前には見せられない」

「エロ本ぐらいどーってことないって」

「すぐそっち方面を連想するところに、お前のダメっぷりが表れて

る」

「男が女に見せられないモンって、それくらいしかないじゃん？」

「アホか」

「あ、妹モノとか制服モノならまだしも、母親モノとかホモだったら引くな……」

「……………話を戻すな？」

一人のこととはいえ、これだけの用意をするととなると、金銭的に決して安くない額を使うことになるはずだが。

「どこかの誰かが心配してくれるのは嬉しいけど、ここまでする価値が、俺にあるか？」

「あるじゃん？ 特殊な才能と経験の持ち主」

「それこそありえない」

十路とみじはコーヒークップを持ち上げて、すする間の一呼吸分で、自嘲にならない準備をしてから口を開く。

「お前もわかってるだろ？ それが俺が育成校に通うことになって、今回退学になった理由だ」

「じゃあ？」

「わからない。だから、これからその学校に行ってみて、直接話を聞いてみる」

「いきなり行って大丈夫なの？」

「もう電話してアポは取ってるよ」

南十星なとせがストローでオレンジジュースに浮かんだ氷をつつく。随分つまらなそうな顔で。

「……………そこに転入するかどうかは、その話次第ってこと？」

「そういうこと。条件次第ではこの不気味な誘いに乗ってもいいし、無理だと判断したら……伯父さんに迷惑かけるかもしれない」  
「メーワクかけるって言っても……こっちに来るって意味じゃないよね?」

南十星は歳相応のすねた顔で、十路の顔を見つめる。

「ああ……そうなるな」

対して十路は歳には似つかわしくない、諦めのような老齢さで溜息をつく。

そんな様子に南十星は気まずげにストローを動かして、迷った末に口を開いた。

「……さっきは茶化したけど、あたしは兄貴が退学になって、よかったと思う」

「まあ、な……」

「兄貴はどうなの?」

「生活には困るけど、もうあんな事に関わらなくて済むから、ホッとしてるのが正直なところ」

「だけど、もう一緒には暮らせないんだ……?」

「俺はお前の近くにいたべきじゃない。俺たちは親がいないから、家庭の事情がややこしいし、なにより普通に生きれる境遇じゃない」  
「……………」

無言になった南十星の、ストローを動かす手が止まった。

「……………あいつら、ふざけてる」

人懐こい瞳が細くなり、獣じみた光が宿る。普段はリスの愛らし

さに隠れた、ヤマアラシの攻撃心。

「なとせ」

何気ない呼びかけに冷たさがこもる。怠惰な野良犬が伏せたまま、軽く牙を覗かせた。

「だって……みんなして兄貴のこと、バカにしてるじゃん……」

それだけでヤマアラシは大人しくなり、シュンとして逆立てた針毛を寝かせた。

「仕方ない」

そして野良犬は苦笑して、ヤマアラシを慰めて、リスの毛皮をかぶせようとする。

「ただでさえ、俺は世界で一番夢がなくて、一番面倒の多い人種なんだぞ？」

言葉を切って、コーヒーカップを空にして。

「俺は《魔法使い》なんだ。しかも出来損ないの」

世界には、《マナ》を操り《魔法使い》と呼ばれる者が扱う《魔法》が存在する。

しかし秘術ではない。誤解と偏見があったとしても、その存在は

使えない常人にも広く知られたもの。

そして古いにしえよりのものではない。たった30年前に発見され、未だいまそのあり方を模索している新技術。

なによりもただのオカルトではない。その仕組みの詳細は明確になっっていないものの、証明が可能な理論と法則。

知識と経験から作られる再現可能な奇跡。それが現代における《魔法》。

その力は、多岐に渡る分野で応用が期待されている。『空気を操る魔法』と『空を飛ぶ魔法』による金属化学の新素材開発、『炎を操る魔法』の応用で新エネルギーの研究、『治癒の魔法』で最先端医療でも不可能だった治療法の確立などなど。

つまり現代社会における《魔法使い》は、優れた科学者であり、技術者であり、研究者でもあると、世間的には定義されている。

しかし存在そのものは知られたものであるが、『魔法使い』は日常的な存在ではない。

その価値が発揮されるのは、人々の生活に直接関わる部分ではないため、まず知られないからだ。

加えて《魔法》を扱える人間は非常に少ないという理由もある。人ならざる知識を処理するための特殊な脳機能を持つ人間は、遺伝学的に数千万分の一の確率でしか誕生しない。

そのため現代では、世界的にも貴重な人的財産として扱うことを法律で定めている国がほとんど。幼少期の検査で適正があると判断された子供は、レベルごとにそういった全寮制の学校に集められて生活し、一般教養と並行して専門技術の教育を受けることになる。

。 十路じゅうろが通っていたのも、そういった特殊教育機関、通称『育成校』

完全寮制、生活費も学費も全て国費で賄われ、次世代の発展に必要な不可欠な人的財産を、未来を作り出す人材へと育てると謳った国家機関。

堤十路は、そんな学校を強制退学させられた。

彼が『出来損ない』になったから。

00 | 015 PM 15 : 23 インターミッション01 (前書き)

インターミッション (任意の合間) を初っ端のこの辺に挟むのもど  
うか…… と思いつつも挿入。

今回は本筋のストーリーには直接は関係ない、オマケ的文章という  
形で使っています。

「つばめ先生、入りますよ……」

「お、来たね、ジュリちゃん」

「わざわざお茶を淹れさせるのに、授業中に呼び出すの、やめてください……」

「いや、そうじゃなくて」

「急に『お鍋食べたくなった』なんて言われても用意できません……」

……

「いや、それでもなくて」

「じゃあ今日の晩ご飯、なにが食べたいんですか……?」

「どうしてわたしが口を開くと、そういう用事だと思うの?」

「いつもそんな用事で呼び出されるからですよ……」

「授業中には呼んでない! わたしもそこまで非常識じゃないつもりだよ!？」

「じゃあ今日は……?」

「ちゃんとした部活」

「今朝の事件でなにか連絡が来たんですか?」

「ううん、別口。転入生が来るから、駅まで迎えに行っておほしいの。」

「簡単な資料は携帯電話に送っておくよ」

「それこそ私じゃなくてもいいじゃないですかぁ……」

「わたし、忙しいんだよね」

「いま思いつきり遊んでるじゃないですかぁ……」

「まーそれは冗談として、わたしより、キミたちがやるべきことだと思っから」

「はい?」

「『普通の転入生』じゃないの」

「……そういうことですか」

「諸々のことを考えた結果でもあるし、しかも今日は」

「部長、学校にいないんでしたね……」

「うん。ついでに3年生の男のｺだし、やっぱり同年代の女のｺの方がいいと思うからね」

「え？先輩なんです？」

「そうだよー。6月のこんな中途ハンパな時期に来る謎の転校生。パンくわえて走ってたら曲り角でぶつかって恋に発展しそうとか思わない？」

「や、全然……というか何年前の少女マンガですか」

「最近の若いモンは形式美を理解せんのお」

「ともかくわかりました……お迎えには行きます」

「あ。さっき届いたって連絡があったから、迎えに行く時には、部屋の新しい備品を使って」

「はい？ 備品？」

「そんでさあ、約束の時間からもう5分過ぎてるから、急いでね」「それ先に言っってくださいよお！？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0589ba/>

---

SSSS

2012年1月2日08時47分発行